

経済理論の歴史的な性格 : A・シュピーートホフ の経済学方法論をめぐって

小澤, 光利 / OZAWA, Mitsutoshi

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

69

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

171

(終了ページ / End Page)

203

(発行年 / Year)

2001-07-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002936>

経済理論の歴史的 성격

—— A・シュピートホフの経済学方法論をめぐって

小澤 光利

目 次

- I はじめに
- II 『経済変動論』への「序説」
- III 経済理論の『歴史的』性格
- IV 比較概念論的な若干の注解
- V 結びに —— マルクスの方法視角から

I はじめに

本稿の課題は、A・シュピートホフの独自固有の経済学方法論を簡潔に伝える2編の資料の紹介と検討を通じて、経済学における理論と歴史との関連の問題を再考・吟味することである。すでに本誌上で紹介したところからも読み取れるように⁽¹⁾、シュピートホフは、観念的純粹理論ではなく、現実科学としての経済学における理論・歴史・政策の総合的把握を独自に志向していた。そして、英米の主流派経済学から等閑視されていたこの方法論的側面に敢えて積極的に注意を喚起し、それを「ドイツ歴史学派の嗣子」による「独自の理論類型」、「方法論的福音 (methodologische Botschaft)」として絶賛したのは、ボン大学時代の僚友でもあり後にハーヴァード大学に移籍し20世紀経済学に巨大な足跡を残したJ・A・シュムペーターであった⁽²⁾。

ここで取り上げる資料の一つは、シュピートホフの主著といえる1923

年の『国家学辞典』全4巻第1分冊に掲載の論稿「恐慌」(Artikel-
 “Krisen”, *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*, 1 Lieferung des
 4. Bandes)を、戦後1955年に彼自身「気の進まないまま」単行本で再版
 するに際して、新たに付け加えた「序説 (Vorbemerkung)」である⁽³⁾。
 実際、E・ザリーン (Edgar Salin, 1892~1974) が言うように、辞書の一
 項目として執筆された論稿が30年後に独立の研究書として再刊されるな
 どということは、「類例のないこと」であった。それはザリーンによれば、
 けだし、当該著作は「ただ単に以前のドイツ学者世代の業績として今も残
 る証であるばかりではなく、今日にあっても当然のことながら、景気研究
 の基礎であり模範として、これに基づいて構築される景気政策にも有効で
 あるからである」⁽⁴⁾。だが、シュピートホフ自身は、それまで「純粹理論
 の代表者たちから度重なる烈しい宣告的攻撃にさらされてきた」項目-
 「恐慌」への初の一括回答として、「体系的に明確化されていなかった」変
 動論に適用された「手続き」を対置する機会として、その後の方法論的熟
 慮を経たその「全体的な手続きの輪郭 (der ganze verfahrensmäßige
 Umkreis)」を与ええる機会として、「再版に同意した」と述べている⁽⁵⁾。
 それゆえに、この「序文」は、シュピートホフの独自固有の経済学方法論
 を本人自身が端的に縮約明示したものとして、きわめて貴重である。

二つ目の資料検討は、「経済様式 (Wirtschaftstile)」に関するシュピー
 トホフの独自の方法論を英米世界に紹介したフリッツ・レートリッヒ
 (Fritz Redlich) による英語訳⁽⁶⁾からの重訳に関するものである。レート
 リッヒによると、その底本は未刊であり、その後続部分も彼の訳で、アメ
 リカ経済学会と経済史学会に向けて編まれた論集⁽⁷⁾のなかに収録されてい
 るが、その英語訳文についてはシュピートホフ自身も「全面的に承認」⁽⁸⁾
 したとされている。「経済様式」に関するシュピートホフの考え方について
 は、わが国においても、すでに秋草実氏によって別のドイツ語論稿⁽⁹⁾から
 比較的忠実なかたちでその内容が紹介されているが⁽¹⁰⁾、その理解は容易で
 はない。シュピートホフの独自固有の用語法をアングロ・アメリカ社会に

伝える際に英訳者の払った苦渋の努力は、それ自体自ずと独自の意義をもつものであるばかりか、われわれにとっても、はなはだ有益であるということ疑いない。これにより、ドイツ語本文からはわかりにくかった点が、むしろ鮮明になることもあろう。

以上2点のシュピートホフ自身による経済学方法論の簡潔にして要領を得た提示は、その比較対照により、晦渋きわまるシュピートホフ学説の内在的な内容理解におおいに資することは確かである。それを通して、われわれ自身の経済学方法論を深化させる^{よすが}縁としたいというのが、本稿の意図するところである。

- (1) 拙稿「《資料》アルトゥール・シュピートホフ『信用政策』—経済学における理論・歴史・政策の総合的把握への一資料」(『経済志林』第68巻第1号, 2000年7月, 所収)を参照されたい。
- (2) 同上465ページを参照。これら文言の出典は, J. A. Schumpeter, Vorwort zu *Der Stand und die nächste Zukunft der Konjunkturforschung: Festschrift für Arthur Spiethoff*, München 1933, S. v.
- (3) A. Spiethoff, *Die Wirtschaftlichen Wechsellen: Aufschwung, Krise, Stokung*, Bd. 1, Erklärende Beschreibung, Tübingen und Zürich, 1955.
- (4) E. Salin, Stand und Aufgaben der Konjunkturforschung, *Die Wirtschaftlichen Wechsellen. ebenda.*, S. 1.
- (5) A. Spiethoff, *Ebenda.*, S. 11.
- (6) A. Spiethoff, The "Historical" Character of Economic Theories, *The Journal of Economic History*, Vol. VII, 1952, Reprinted 1961, New York.
- (7) A. Spiethoff, Pure Theory and Economic Gestalt Theory; Ideal Types and Real Types, F. C. Lane and J. C. Riemersma ed., *Enterprise and Secular Change: Readings in Economic History*, 1953 London.
- (8) 編集者序文。F. C. Lane and J. C. Riemersma ed., op. cit., p. 444.
- (9) A. Spiethoff, Die allgemeine Volkswirtschaftslehre als geschichtliche Theorie: die Wirtschaftstile, *Schmollers Jahrbuch*, 56. Jg. Bd. 2, 1932.
- (10) 秋草 実「シュピートホフの経済史理論としての『経済様式論』」, 『山口経済学雑誌』第22巻第1・2合併号, 1973年。

Ⅱ 『経済変動論』への「序説」

シュピートホフの研究活動の前半が主著「恐慌」に結実・集約される経済変動論研究であったとすれば、その後半は方法論的研究によって特徴づけられるということについては、すでに触れた⁽¹¹⁾。シュピートホフが、それまでの「度重なる烈しい宣告的な攻撃」にたいして「誤解を招くことなく」初めて回答しようと判断したのは、そうした方法論的格闘を経た後のことであったことは、新版「序説」から直ちに知ることができるであろう。

- (11) 拙稿「《資料》アルトゥール・シュピートホフ『信用政策』—経済学における理論・歴史・政策の総合的把握への一資料」、『経済志林』第68巻第1号、465ページ。

【凡例】 ① 1), 2) 等々は、原典の脚注であり、(1), (2) 等々は、筆者(小澤)による注記である。

② アステリスク(*)を冠する補注と記述中の〔 〕内の補足は、筆者によるものである。

③ 欄外の〔 〕で、原典のページを表記する。

〔11〕 序 説

私は気の進まないままに、1923年に国家学辞典、全4巻第1分冊に収録された項目「恐慌」の再刊に同意しただけである。とにかく当時においては、辞典としての必要性、とりわけその紙面上の制約が決定的だったために、今日では、私の願望はヨリ委曲を尽くした叙述と論証に向けられている。だが目下のところ、私はそれをまだ提示することはできない。たとえば、ヨリ詳細な論証への願望が、私の変動学説の基礎たる長期的統計のこれに続く刊行によって部分的にかなえられるにせよ、そうである。私は、すでに30年を経た項目を書き改めることには反対である。なぜなら、どこから始めどこでやめるかの境界はないだろうからである。項目「恐慌」

は経済変動の研究の発展において決定的な位置を占めているから、それが受け入れられたままの表現にとどめておかなくてはならない。当該項目と緊密な時間的連携をもってその後出版された若干の小著作の成果が、任意の箇所に挿入されているのは、上に述べたところと何ら矛盾するものではない。それらの成果は、それが発表された場所においては親しみにくいものでしかなかった。

手続き上で「説明的記述」と特徴づけられる項目「恐慌」は、純粋理論の代表者たちによるたび重なる厳しい宣告的な攻撃にさらされてきた。それについて私はこれまで回答してこなかったのであるが、その訳は使用された手続きがまだ、私自身に対する新たな誤解を招くことなしに、変動問題へのその適用を正しい照明の下に置くことができたというほど体系的に明確化されていなかったからである。しかし、とにかく少なくとも、全体的な手続きの輪郭は示されるのであり、私はその使用された手続きに確固たる立場を寄せることができる。今や私は、これまで果たさなかった回答をできるだけ簡略にここで与えることができる。

私の「説明的記述」は2種類の理論、すなわち歴史的理論と具象的理論を用いているから、私の変動学説は歴史的 = 具象的学説 (eine geschichtliche-anschauliche Wechsellagenlehre) である。

- (12) 理論を展開するには2つの方法がある。その一つは「純粋理論 (reine Theorie)」であって、古典学派において全盛期を迎え、ケネー、リカード、チューネン、メンガー、ワルラス、ジェボンズ、クラーク、パレート、シュムペーター、ケインズにおいて頂点に達する。もう一方の理論種類は、重商主義者、リスト、シュモラー、ゾンバルト、マックス・ウェーバーによって展開されたものであり、私自身もこの系列に身を置く。その理論の呼称は統一的ではなく、「経験-実在的」・「具体的」・「具象的」理論と呼ばれている。どちらの理論も抽象と孤立化をおこなう (abstrahieren und isolieren) が、両者はそれぞれ独自のやり方でこれをおこなう。両者を抽象度に応じて区別しようとして、例えばどれだけ抽象を弱めても純粋理論は

決して具象的理論にならないし、また抽象をどれほど強めても具象的理論は純粹理論になることもない。純粹理論は、現実と無縁の純粹の構成物を度外視するとしても、常に一定の課題に適合するように加工された諸資料 (Daten) で研究がおこなわれるのであり、例え抽象がなお一層著しく弱められたとしても、この理論は決して現実性に到達し得ない。具象理論の所与性 (Gegebenheiten) は現実性に根差しており、しかも現実の歴史的・一回性 (geschichtliche Einmaligkeiten)* から抽象される。この一回的特徴の純化 (Bereinigung von einmaligen Zügen) は一定の歴史的現実性に直面してすこぶる重要でありうるし、そしてまた事実は常に多面的で綿密な観察によって発見されたところの現実の規則性であって、一定の研究上の関心から恣意的に削られたり付け加えられたりするものではない。孤立化も同じである。純粹理論においては、個別的研究にとって望ましく思われるものが恣意的に分離される。具象理論においては、規則的で本質的なものが分離される。しかし、これは個々的には不分離なもので、全体として存在している。従って2種類の理論の相違は、抽象と孤立の仕方にゆだねられている所与性の違いにおいて、その極に達する。純粹理論にあっては、恣意的に選択されて合目的的に加工された個別的なものが、具象理論にあっては本質的な一切のものが、それぞれ現実の規則性から分離される。純粹理論は合目的的に加工されたモデルを用いて、具象理論は現実型 (Realtyp), すなわち歴史的・一回性から純化された現実性 (von geschichtlichen Einmaligkeiten bereinigten Wirklichkeit) を用いて研究される。純粹理論の諸資料は技術的補助手段として案出されるが、具象理論の所与性は現実を観察することによって本質的な規則性として発見されるのである。出発点におけるこうした本質的な相違が、その研究手続きが実施に移されるに際して、またその成果において、尾を引くことになる。純粹理論は論理的生成の法則的な経過を展開させるが、その成果は一つの

[13] 教義であってなんら特別の名称をもつものではない。具象理論は「説明的記述」を展開し、その成果は現実の模写 (ein Abbild der Wirklichkeit)

を示している。今では、さらに詳しくは、別の拙論で読み取ることができる¹⁾。私が明らかにしたかったことは、具象理論は真正な理論として評価される必要があり、純粋理論と並ぶ独自の理論種類として独立して対等の位置に立つということ、これである。

* 本稿では、“geschichtliche Einmaligkeit”を「歴史的一回性」と訳出しているが、後に見るごとく、F・レートリッヒは“Einmaligkeit”を“uniqueness”と英訳している。これを参考に「唯一性」と和訳することもできようが、内容的には、歴史現象の個性的独自性のことを意味している点が重要である。

- 1) 次を参照のこと。アルトゥール・シュピートホフ「グスタフ・フォン・シュモラーと国民経済学の具象理論」(Arthur Spiethoff, Gustav von Schmoller und die anschauliche Theorie der Volkswirtschaft, *Schmollers Jahrbuch* 1938)；「具象的国民経済学理論と純粋国民経済学理論，その相互関係」(Anschauliche und reine volkswirtschaftliche Theorie in ihrem Verhältnis zueinander, *Synopsis*, Festgabe für Alfred Weber 1948)；「純粋理論と具象理論；理念型と現実型」(Pure theory and economic Gestalt theory. Ideal-types and real types, *Enterprise and Secular Change*. Readings in Economic History, edited by Frederic C. Lane and Jelle C. Riemersma 1953.)。

また第2に、私の変動理論は、あらゆる具象理論と同様に一つの歴史理論であって²⁾、ある一定の一回的な歴史的な事情について、すなわち主として自由市場経済を伴う高度資本主義経済様式の優位によって刻印されている時代について、妥当するものであるということが誤認されている。試みられるべきは、この様式の現実型をとらえることである。私は好況、恐慌および不況の循環を、その対立的推進力の下で高度資本主義の発展がおこなわれるところの高度資本主義的経済様式の展開形態として特徴づけている。1822年から1913年までの期間がその経過を最も攪乱なく具体化しているのであり、またその時期が私の分析と理論の基礎になっている。それ以前の時期は未発達な資本主義を示しているし、それ以後の時期の誘導され計画的介入を受け、あるいは管理される国民経済においては、特徴的な実在型からのかなり大幅な乖離が示される。それゆえ、循環的な展開は

- 明らかに歴史的な現象であり、つまり一回的な歴史的諸条件に結びついて
 いるのであって、私の理論があるいは将来の時期について妥当をしないと
 という異論が唱えられても、それは見当外れであって提起された課題を誤解
 している。肝心な問題は、経済様式が最終的かつ決定的に変化したのかど
 うか、ということである。以下、本書で論述されている歴史記述は、1895
 年から1913年までの19年間にわたる好況周期で終わっている。両大戦と
 戦争による諸結果の克服に忙殺された時期を度外視するとしても、その後
 の時期には重大な新たな事態が現れ、最近の時期が従来の時期と同じ糸で
 くくられてよいのかどうか、また過去の周期から得られた観点が保持され
 (14) うるのかどうか、ということの問題ならしめている。経済の体質が変化し
 ていることは明らかである。しかも、資本主義世界は分裂し、資本主義的
 に良好な状態にとどまっているのはその一部のみに過ぎない。経済経過の
 統一的な世界経済のリズムが分裂し、これにより好況と不況の統一的関係
 にヒビが入った。新たな不況は底が深く、好況は、部分的で、勢いがなく、
 短期的であった。したがってまた、循環も短縮化した。一連の重要な製造・
 卸売部門は³⁾、好況中においても、過剰生産を克服することができず、失
 業者数も高いままであった。おそらく、こうした好況期過剰生産の大幅な
 拡大のうちに、高度資本主義経済様式の老衰状態といえる一つの現象が示
 されている。とはいえ、グスタフ・クロージングや、ジョセフ・A・シュ
 ムペーターが指摘しているように、1919年以降の大周期も、依然として
 経済変動の支配的影響のもとに置かれていたし、著しく強力な政治的干渉
 と諸措置も経済変動を廃絶することはできなかった。

2) 次を参照のこと。アルトゥール・シュピートホフ「歴史理論としての一般的
 国民経済学，経済様式」(Arthur Spiethoff, *Die allgemeine Volkswirt-
 schaftstheorie als geschichtliche Theorie, die Wirtschaftstile; Schmollers
 Jahrbuch* 1933); 同「経済理論の『歴史的』性格」(do., *The "historical" char-
 acter of economic theories, Journal of Economic History*, Spring 1952.)。

3) 本書『経済変動論』(*Die Wirtschaftlichen Wechsellagen*)，141-2 ページ

以下を参照せよ。

1919年に始まるこの周期が、単なる鈍重な周期（eine Ermattungs-spanne）に過ぎないものであるのか、それとも新たな経済様式への移行途上における変形周期（eine Wandlungusspanne）であるのか、という点は、将来の教えるところである。後のケースであれば、新しい様式の不均衡が新たな理論の取り組むべき課題とされるに違いない。しかしながら、その場合でも、古い理論の成果が損なわれることはないであろう。なぜなら、古い理論は将来の様式を理論的に把握しきる場合にも最も重要な認識源泉だからである。この成果は、およそ次のごときである。

- a) クレマン・ジュグラーによって認知された恐慌や過剰生産に代わる認識対象としての循環（Kreislauf）。
- b) この循環の
 - 1. 一定の歴史的環境とのつながり、
 - 2. 一定の心理状態とのつながり、
 - 3. 自由市場経済とのつながり、
 - 4. 市場拡張とのつながり、
 - 5. 革命的な無機的技術とのつながり。
- c) 根底的な経済進行要因としての投資。
- d) 所得によって購買される享樂財（Genußgüter）（消費財）と資本によって購買される収益財（Ertragsgüter）（投資財）との区別。
- e) 投資の指標としての鉄消費指数。
- f) 因果関係その諸要因が経済内のであり、しかもそれらがある一定の歴史的経済様式の枠内において、循環を必然的に経過せしめるような因果関係の分析。

- [15] これらすべては一般的に利用される用具となっているが、この用具はほとんど誰でも手にするところであり、例えば、完全雇用という新たな目標を目指す学説にとっても不可欠なものとなっている。

私の変動学説の読者はたびたび使用されている資本概念につまずいてきた。私は今では全く別様に財貨世界を構成しているし、全く別の資本概念を使っているが、このように表明しても、それによって私が差し障りのある障害を除去するわけではないから、問題はないであろう。私は自分に告げられている難点を、使用された用具を説明することによって克服するように努めなければならない。

問題は、主としてカール・ロードベルツス、アドルフ・ワーグナー、そしてオイゲン・フォン・ベーム＝バヴェルクに遡る資本概念の二分化である⁴⁾。私は2つの概念の内容を財貨世界の所属構成に関連させて示すことによって、明らかにしたい。

- 4) 次を参照せよ。『19世紀におけるドイツ国民経済学の展開』4部第1巻、18ページ以下：シュピートホフ「貨幣に関する学説」、ライプツィヒ1908年 (*Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im 19. Jahrhundert. 1. Teil IV*, 18ff.: A. Spiethoff, Die Lehre vom Kapital. Leipzig 1908)。

社会資産* (Sozial-Vermögen)、欲望充足源泉としての経済的財貨の在庫：人間、物的財貨。

A. 享楽資産 (Genußvermögen)、直接的な欲望充足に役立つ経済的財貨の在庫 (享楽財)。

1. 消耗資産 (Verzehrungsvermögen)、これは、欲望充足の際にすぐに消失する (消耗財)。
2. 有益資産 (Nutzvermögen)、これは欲望充足のために、継続して使用されて初めて消失する有益財。

B. 生産資本** (Erzeugungskapital) (社会資本)。新たな経済的財貨を生産するのに役立つ経済財の在庫。

1. 労働を通じて達成される改良を伴う地所。
2. 財貨生産に役立つ労働力。
3. その他の財もその物的性質によってではなく、それが特別の目的

關係に置かれた場合にのみ、生産資本に属することがある。例えば、財貨の生産に際して雇用される労働力にとって必要とされる範囲の生計の資、財貨生産に役立つ限りでの動物、交通手段、貨幣、建物。

4. 物的性質により、生産資本に属する生産設備、生産装置、工具、機械、財貨生産用の原料および補助材料。
5. 企業が依存している独占、特許。

(16) **私的資産** (Privatvermögen)、個人の所有として存在する経済材の在庫を呼称する。

A. 享樂資産

1. 消耗資産
2. 有益資産

B. 営利資本 (Erwerbskapital) (私的資本) は、個人の所有する資本のうち所得を得るために充用される部分である。

1. 無条件的な生産資本、特に地所、労働力、知識、才能、貨幣。
2. 生産資本に含まれない確実な事情：情報、特許、独占、履行権。
3. 請求権、特に銀行、有価証券に関する請求権。
4. 所有者が自家消費するのではなく、貸与や貸付を通じて、別の財貨を取得するために、充用されるところの享樂財。

躓きの石は、「営利資本」という概念である。私はこの概念内容を明らかにすることによって、是正策を講じたものと思いたい。

テュービンゲン 1954年クリスマス アルトゥール・シュピートホフ

* 囲み線は、原文では広い文字間隔の箇所。

** ゴシック体は、原文のまま。

Ⅲ 経済理論の『歴史的』性格

[131] 訳者序文

この論文の重要性を理解する上で、アメリカの読者は、タルコット・パーソンズ (Talcott Parsons) が言うように、ドイツの「観念的経験主義 (idealistic empiricism)」は、あらゆる人間的事態の具体的な唯一性と個性 (uniqueness and individuality) のために、分析的な社会理論や経済理論との絶縁をもたらしたということを想起しなければならない。「科学的な理解の一般的な分析水準」は、ア・プリオリに人間活動の領域から排斥されたのである。「特殊歴史的なケースの具体的な個性の見地から」、人間的事態を理解することが目標となった。アルトゥール・シュピートホフ教授は、かつてグスタフ・フォン・シュモラーの弟子であり、その後彼の助手となったが、後にベルリンで研究していた期間、エドウィン・F・ゲイ (Edwin F. Gay) の友人となり*、先の立場から離れたのである。彼は分析的理論を適正な学科として認めることによって、19世紀ドイツの典型的な態度と考えられたものから免れた。

* Edwin F. Gay (1867～1946)；アメリカの経済史家。ミシガン大学卒，ドイツ留学後1902年ベルリン大学で博士号を取得，1902～36年ハーヴァード大学教授，イングランド土地制度史の研究で知られる。

シュピートホフの論稿¹⁾のこの翻訳は、いくつかの特殊な問題を引き起こした。教授は、頻繁に Geltung という用語を用いている。正確に訳せば、「有効性 (validity)」である。陳述が Geltung を有しているという主張は、3つの事態を意味しよう。すなわちそれが論理的に妥当であるということ、それが事実に基づいているということ、あるいはそれが問題となっているケースに適用しうること、この3つである。Geltung という概念についていえば、Allgemeingiltigkeit [一般的妥当性] というの

がそれであり、「一般的妥当性 (general validity)」である。もし理論が論理的に妥当であるとすれば、もちろんそれは一再ならず論理的妥当性を有している。すなわち、Allgemeingiltigkeit [一般的妥当性]をもつ。だが、これはアルトゥール・シュピートホフが関心を持つところの一般的妥当性ではない。既製のドイツ認識論の流れに沿って、彼も、Allgemeingiltigkeit という用語を2つの異なった文脈において用いている。すなわち、一般化の性格を持つあらゆる陳述に関して、事実に基づき、例外を許さないような陳述に関して、とである。翻訳は、シュピートホフ教授があらゆる可能な陳述の論理的な有効性ないし真実性を意味している場合には、普遍的妥当性のことを、そうではない場合には、陳述の一般的な性格あるいはその適用可能性のことを言っている。後者は、シュピートホフが、ある定理はそれが1つの特殊制度的編成に適用される際の、現実の真実に近い像 (a truth-approaching picture of reality) を得るための適当なツールである、と言う意味で使っている場合である。

そのうえ、読者は、ドイツ語の historisch は「歴史的 (historical)」と訳されるけれども、対応する英語に比べて広い意味があるということを理解しなければならない。ドイツの認識論学者は、時の変化に伴う歴史的現象の特徴的な姿において、唯一性 (uniqueness)* を特に強調した。結局、歴史的現象と呼ばれうるのは、その唯一性により、歴史的発展の一部分や一区分となった、あるいは、なりつつある、もしくは、将来なるであろうすべての現象のことである。もっと具体的に言うならば、次回の戦争は、今日この意味において歴史的現象と呼ばれうるし、また同じことは、実際にいつ起こるかということにかかわらず、次回の恐慌についても真である。明らかに唯一性は、1350年代の黒死病や19世紀における生活水準の向上のような、大量現象にも付着しているにちがいない。読者が常に歴史的という用語の特殊な意味合いを想起するように、その用語は引用符に包まれるだろう。

* 先に（本稿 177 ページ）指摘したように、この “uniqueness” は、F. レートリッヒによる “Einmaligkeit” の英訳であり、内容的には、「個性的独自性」の意である。

- 1) その第 I 節と第 II 節が、ここに印刷される。関連資料は、脚注 10) で挙げている F. C. レーンと J. C. リーマースマ編の経済史論集、近刊 [*Enterprise and secular change. Readings in economic history*, edited by Frederic C. Lane and Jelle C. Riemersma 1953], に登場するはずである。

I.

優れて経済的な諸現象は、時間的に条件づけられ、かつまた特殊な地理的領域に根ざしている。それらの現象は、時間の経過につれて変化するから、普遍的な適用可能性を意味する諸概念や諸定理を援用することによっては取り扱うことができない。経済理論は、これらの現象を経済生活の型 (patterns of economic life) を区別することによってのみ、初めて取り扱うものとするのであるが、この型は、歴史過程の推移するうちに存在するようになったものである。実のところ、基本的な経済制度には本質的で典型的な差別があり、それに応じた多数の型が限定されなければならない。そうした種類の型のことを、ここでは経済様式 (economic style) と呼ぶ。それら経済様式のすべてが、自分自身の経済理論を必要とするが、その理論は真の理論 (genuine theory) でありながら、その様式の領域についてのみ適用しうるに過ぎない。だから、全体を包括する一個の一般理論は、区別できる限りの経済様式の存在に応じた多くの異なった諸理論を含むであろうし、また個々の特殊理論は、限られた適用可能性を持つに過ぎないであろう。例えば、19 世紀の諸現象に適応しうる経済理論は、19 世紀の諸現象から出発しなければならないし、また仮に、その基本的な経済制度が急激な変化を被ったのであれば、全く新しい理論構成が新たな経済様式を取り扱うために必要とされるであろう。かくて、理論家の仕事は決して完成することはないということになる。というのは、理論体系に具現されなければならない変化が絶えず生じるからである。

こうした事情にあって、経済理論は、その適用可能性がある一つの経済様式存在と支配とに依存しているという意味において「歴史的な」カテゴリーである。この場合、経済様式の諸要素は理論構成に体现されている。様式の範囲が広がれば、それだけ理論は適切なツールとなる。それが見いだすものは、一般化と真に理論的な性格である。経済理論は「歴史的」理論であり、同時にまた「真の」理論であるという可能的な性格のゆえに、「歴史的」理論、すなわち時間に制約された理論となる²⁾。

- 2) シュムペーターは、歴史的理論という用語が含む意味をいくつかに区別した。そのうちの一つは、上と同じものである。*Schmollers Jahrbuch*, L, 1926, S. 367を参照せよ。

上のパラグラフは、歴史学派経済学の根本的な考え方を表している。そうした考えが先鋭的な形で明示されることは稀であったが、しかし、直観
〔133〕 的には、常にその学派の代表的な人々の気持ちにおいて、前提されていたとみてよい。彼らは、経済理論が経済制度における相違や変化にもかかわらず普遍的に妥当しうると、留保なしに主張することには反対した。彼らの正当な反対は、時間に制約された理論の発展に迎えられることになる。

我々が過去から相続してきた経済思想の大部分の体系を吟味するならば、それらはその著者たちの生きていた諸条件に根差しており、またその時代の諸問題に鼓舞されたものだということが、実際に分かるだろう。このことは、とりわけその経済思想が広く経済政策に関する陳述からなる場合には正しい。だが、彼らの代表者たちはその限度に気づかなかった。すなわち、彼らは普遍的妥当性の解決を厳密に仕上げたものと信じていた。例えば重商主義の経済学的著作は、16、7世紀や18世紀における発展途上の領主国の経済制度や仕事を取り扱っている。代わって、古典派経済学は、高度資本主義、とりわけ自由市場経済の諸制度について論じている。経済思想体系が古くなればなるほど、それだけその体系は経済政策に関する考え方によって影響を受けていた。だから、結果的には、それらの体系はま

すます特殊な時期について、その本来のところを示さなくなるばかりか、特殊な国についても本来のものを示さなくなる。グスタフ・フォン・シュモラーの陳述によると、イギリスの経済的自由主義とその経済理論は、1760年から1850年の間に存在したイギリスの経済生活を背景にして初めて理解されうるものである。必要な変更を加えれば、同じことはフランスの重農主義についても妥当する。理論を「国民的」理論として考察するとき、フリートリヒ・リストは、こうした考えを提示した最初の人物であった。またカール・クニース³⁾は、経済理論は、普通その創成期の経済的諸条件に影響されるということに気付いていた⁴⁾。

- 3) クニースは、特殊な諸制度によって特徴づけられる経済生活のあらゆる種差に照応する理論を要求した。
- 4) 哲学者ディルタイは、宗教、韻文そして哲学について、類似の考え方を詳論した。

現に存在する経済制度から出発するという理論化の共通の手続きは、正しいものであり、ここで批判の余地はない。というのは、現実的な理論を目指すならば、立てるべき基礎をそれ以外のところに見いだすことはできないからである。危険が潜むのは、ここではない。大抵の経済理論の「歴史的な」基礎を看過すること、また、理論の見いだしたことが普遍的に適用可能だと素朴に承認すること、誤謬が横たわるのはここである。歴史学派経済学は、その誤謬を暴露することから出発した。その理論的到達点は、

(134) 時間に制約された理論、あるいは別に表現すれば、経済様式の「歴史的」理論となるはずである。しかし、この到達点が明確な形で認識されることはなかった。歴史学派の代表者たちは、気の進まないままに仕事を続けただけで、その到達点に間接的に接近していたに過ぎなかった。

「歴史的」理論が過去だけを取り扱うと信じるのは、誤解である。それは、過去と同様に、現在と将来についても、十分取り扱うことができる。歴史理論の特徴点は、それに属する事柄が、いつでも、また、いかなる場

所にでも存在するわけではない、ということである。だが、主題の生涯が過去において学ばれたのか、現在学ばれているのか、あるいはまた将来において学ばれるのかということは、本質的ではない。なぜなら、我々の文脈において、「歴史的」という用語は、時間の変化に従属している諸現象の唯一性〔個性的独自性〕という意味を含んでいるからである。だから、来るべき経済生活に関する「歴史的」理論というものがありえないとする主張は⁵⁾、「歴史的」理論以外には、未来を取り扱う理論は存在しない、という主張によって反論されるに違いない。歴史的理論は経済政策にとって無価値であるという批判も、根拠はない。時間の変化に従属する唯一的〔個性的独自の〕な諸制度や型を取り扱う理論は、歴史的理論であり、また経済政策を目的とする場合、歴史的理論こそが、あてになる唯一の理論である⁶⁾。

5) こうした批判については、ルートヴィッヒ・フォン・ミーゼス『国民経済学の根本問題』(Ludwig von Mises, *Grundprobleme der Nationalökonomie*, Jena 1933) viii, x, 3 ページ、また注(12)を見よ。

6) 歴史的理論への道を準備した経済学者たちの貢献が、しばしば認められている。アルトゥール・ゾマー (Arthur Sommer) は、経済の諸段階に関する初期の理論を工夫した経済学者たちが、その気持ちの奥に経済政策を携えていたということを明らかにした。「古い段階理論の内容枠組みおよび意義について」(Über Inhalt, Rahmen und Sinn älterer Stufentheorien, *Synopsis*, Festgabe für Alfred Weber, Heidelberg 1948, S. 537ff.) フリートリッヒ・リストは、雄大な政治的世界像を「歴史的」理論のうえに基礎付けた。最後にハインリッヒ・ディーツェル (Heinrich Dietzel) は、方法論の見地において歴史学派経済学に批判的であったが、一定の留保付きで、少なくとも、歴史学派が、ラウ (Rau), ヘルマン (F.v.Hermann) そしてネブニウス (Nebnисуs) のような初期のドイツ人著述家たちの確信、すなわち経済生活を支配する自然法則の考え方によって同時代人達が捉えられていた呪文、を打ち砕いたメリットを強調した。さらに、ディーツェルは、歴史学派が競争を万能薬として信じ込むことをやめたこと、また、経済生活における歴史的現実を観察し説明することに着手したこと、この2つを歴史学派の業績として指摘した。前者についての栄誉は、旧グループのロッシャー (Roscher) やヒルデブラント

(Hildebrand)に与えられ、後者についてはシュモラーが責任を負うものと考えられた。ハインリッヒ・ディーツェル『理論的社会経済学』(Heinrich Dietzel, *Theoretische Sozialökonomik*, Leipzig 1895, pp.112/3)

他方、ルートヴィヒ・シュテフィンガー (Ludwig Stephinger) のようなハイデルベルグの哲学研究者とハインリッヒ・リッケルト (Heinrich Rickert) のような認識論者。かれらが、経済学を本質的に現在を部分ないし区切りとする歴史と同一視するところまで進んだとき、行き過ぎてしまった。『国民経済学の方法』各所 (*Zur Methode der Volkswirtschaftslehre*, Karlsruhe 1907, passim.) シュテフィンガーにとっては、経済理論と一般化の性格を持つ他の陳述は、歴史過程を説明するためにのみ有用である。もちろん、これは誤っている。

経済理論と経済史、両者は相並んで同じ平面に立ち、同等の価値を持つ特殊な研究主題を示しているのである。

経済様式 (economic style) という概念の理論的地位を特別に考察する前に、様々な形での経済認識への接近について述べておくことが望ましい。一般的な図式は次のように素描されよう。

1. 非歴史的理論

2. 歴史的理論

a. 「理念型」をツールとして用いる純粹理論 (pure theory, using “ideal types” as tools)

b. 「現実型」をツールとして用いる経済形態論 (economic Gestalt theory, using “real types” as tools)

3. 経済史

- (135) 非歴史的理論は必要によっては、純粹理論であるが、すべての種類の経済生活が共有する事柄を取り扱うだろう。そのように表現される経済諸現象は、大部分が歴史的な性格のものであり、したがってまたそれを取り扱う諸概念も歴史的な概念であるとはいえ、実際に存在している⁷⁾。変わることのない斉一性 (invariable uniformities) を示し、しかもまた時間の変化に従わないような、至るところに見られる諸現象を取り扱うために、非歴史的理論は、それらの現象を孤立させるモデル⁸⁾を用いることができる。

もう一方の非歴史的理論は、現実におけるいかなる対応部分も、持たないし、持ったことのない諸条件を仮定する任意のモデルを取り扱う。{これらは最近、非経験的モデルと呼ばれている。F.Redlich}⁹⁾ 2つのタイプの非歴史的理論は、一種の普遍的妥当性を有している（もちろん、任意のモデルを取り扱うその2つの理論は、論理的妥当性のみ有する）が、現在過去あるいは未来という実際に存在する現実に対する適用性は、持っていない。現実への適用性は、歴史理論によって得られるのである。

歴史的理論の内部で上の図式に示されるように、2つの理論が、すなわち、経済純粹理論と経済形態論 (economic Gestalt theory) とが、区別されなければならない¹⁰⁾。

- 7) ツヴィーディネク = ズーデンフォルスト「理論的概念構成と経済史」(Otto von Zwiedineck-Südenhorst, Theoretische Begriffsbildung und Wirtschaftsgeschichte, *Schmollers Jahrbuch*, Lvi, 1933, 873ff.)。
- 8) この種の理論の一例としては、ゴットル = オットリリエンフェルト『永遠の経済、経済生活原論』(Friedrich von Gottl-Ottlilienfeld, *Ewige Wirtschaft, Grundlehre von Wirtschaftsleben*, Berlin 1934, 2vols.)。
- 9) 英訳者 [F・レートリッヒ] による補注。コーブランド「制度派経済学とモデル分析」(Morris A. Copeland, Institutional Economics and Model Analysis, *American Economic Review*, XLI No.2, 1952, p.62)。こうしたモデルのドイツ語の用語は, "Konstruktionsmodelle" (構成モデル) である。
- 10) 英訳者 [F・レートリッヒ] による補注。「具象的理論 (anschauliche Theorie)」という用語については、シュピートホフの論文「具象的国民経済学理論と純粹国民経済学理論、その相互関係」(Anschauliche und reine volkswirtschaftliche Theorie in ihrem Verhältnis zueinander, *Synopsis*, 1948, p. 569ff.) を参照。この論文においてシュピートホフは、「具象的理論 (anschauliche Theorie)」[経済形態論 (economic Gestalt theory)] を経済の現実を取り扱う理論として描いている。純粹理論と対照的に、それは、特殊な関係を研究する目的のために諸現象を孤立化させたりしない。それはまず、「意味体系 (system of meaning)」ないし「意味の複合 (meaningful complex)」(それらは、タルコット・パーソンズによる "Sinnzusammenhang" [意味連関] というドイツ語の訳語である) を確定する。次に、帰納的論理過程を経て

理論家は、唯一〔個性的独自〕的諸現象の限界づけを始める。こうして彼は、先の意味の複合に鑑みて、本質的な諸特徴を持ち、他方でまた同時に、規則的に生ずるところの諸現象を選びぬく。その学派の目標点は、諸現象の個別的特性の斉一性 (the uniformities of a discrete species of phenomena (“Art-eigenheit”)) を、一般的に、描き出すことである。

現代の哲学や心理学に明るい研究者は、直ちに「具象的理論 (anschauliche Theorie)」とフッサール現象学およびゲシュタルト心理学との血縁関係を認めるであろう。その学派の理論家を目指しているのは、全体あるいは、部分＝全体、すなわちゲシュタルトである。知識世界におけるシュビートホフの位置ならびにこの論文の理解のためには、タルコット・パーソンズ『社会的行為の構造』(Talcott Parsons, *The Structure of Social Action*, New York 1937 [稲上毅・厚東洋輔訳, 木鐸社, 1976年-], Part III, p.473ff.) が、非常に有益である。翻訳者序文中の引用箇所は、パーソンズの著書の477ページからのものである。

- [136] 純粹理論は、諸現象の孤立化によってもたらされるモデルを取り扱うが、ある特殊な時間や特殊な場所にだけ存在した諸現象を、すなわち特殊な経済様式にとって意義を持つ諸現象を孤立化させることによって、モデルを立てる場合には、純粹理論は「歴史的」である¹¹⁾。こうした理論は普遍的に適用しうるものではないし、また、それが見いだした事柄も、経済の現実の適切な像を与えるという意味において、普遍的に妥当するものではない¹²⁾。経済形態論は、まさにその本性からして「歴史的」である。というのは、その主題が、経済的現実が唯一〔個性的独自〕的であるという程度において (このことは、それは「歴史的」であるという程度においてと言うのと同じことである)、経済的現実に置かれているからであり、すべての唯一的な経済現象が時間の変化に服しており、また地理的領域に根付いているからである。けれども、経済形態論が主題とするところは、こうした唯一〔個性的独自〕性ではなく、むしろ繰り返される斉一性 (recurring uniformities) である。研究者が、唯一〔個性的独自〕的な経済の現実を取り扱う場合に現れるこうした斉一性は、偶然的なものである。それらは、諸現象自体と同様、時間に制約されており、それゆえに歴史的で

ある¹³⁾。

- 11) シュムペーター「純粹經濟理論の命題の歴史的制限性について」(Joseph Schumpeter, Über die geschichtliche Bedingtheit der Sätze der reinen Wirtschaftstheorie, *Schmollers Jahrbuch*, L, 1926, p. 372) を参照せよ。
- 12) 翻訳者 [F・レートリッヒ] 注。アルトゥール・シュピートホフの考えは、タルコット・パーソンズの解釈の範囲では、マックス・ウェーバーの線上にある。すなわち、後者の認識論的立場が前者の論理を理解する上で助けとなるというタルコット・パーソンズの解釈の範囲で。タルコット・パーソンズの解釈に従えば、マックス・ウェーバーは歴史的個性 (the historical individual) の分析、またはそれと他のものとの比較の過程、すなわち一般的概念の形成過程において、一般的概念の斉一的な体系ができあがってくるとは信じなかった。むしろ、彼は、認識上意義ある諸観点に応じて、それだけ、たくさんの諸体系が存在するというを示したのである。他方、こうした一般的概念体系は、歴史的個性を超越する。パーソンズ pp. 593, 594 を参照。シュピートホフは、この基礎的な認識論的洞察を経済学の領域に適用するのである。
彼自身は、翻訳されていないこの論文の一節において、彼の認識論がヴィルヘルム・ヴントの論理学体系の線上にあるという事実を指摘している。ヴント『論理学』(Wilhelm Wundt [1832~1920], *Logik*, 4th ed., Stuttgart 1921, III, pp. 542, 543) を参照せよ。
- 13) フォン・ミーゼスは、その『国民経済学の根本問題』において、無条件に歴史的理論の存在を否認した。カール・ボーデ (Karl Bode, Die Grundprobleme der Nationalökonomie, *Schmollers Jahrbuch*, LXVII, 1933, p. 87ff.) は、「歴史的」理論の不存在を論証しようとするミーゼスの試みを間違いであると見た。見解の相違は、経済理論をミーゼスが法則定立的、先験的科学 (a nomothetic a priori science) と考えていることに根差している。{翻訳者 [F・レートリッヒ] のコメント：それはまた、ミーゼスがもっぱら論理的妥当性のことを考えているのに対して、シュピートホフ教授は、真実接近的な現実像 (a truth-approaching picture of reality) を与えるという意味における適用可能性および妥当性の観点から考えている、ということのうちに横たわっている。}

II.

あらゆる「歴史的」理論にとって、経済様式¹⁴⁾という理論的概念が重要である。というのは、「歴史的」理論を展開するためには、まず、経済生活における時間に制約された諸差異を、理論に接近しやすい明瞭な制度的機構（経済生活の型）を得るような仕方、分析しなければならないからである。経済様式という概念は、その終点に至る一つのツールである。それは、ある制度的機構から経済生活の唯一〔個性的独自〕的ケースを作り出すところの諸特性（the properties which make out of an institutional setup a unique case of economic life）を反映している。研究者は、「経済様式」というツールの助けを借りて、自分の研究にとって明確に限定された主題にたどり着くのである。それは、経済生活の仮説的ないし現実的な型であろうし、また一つの制度的機構を全体的に取り扱うこともできるし、一定の諸制度を取り扱うこともできるものであろう。

- 14) この概念は、私が別の箇所ですく述べてのように、経済形態論の認識論を基礎として、初めて理解するものである。〔注10〕を参照のこと。そこで私は、特に、あらゆる種類の「歴史的」理論とその関連性について触れている。〔翻訳者〔F・レートリッヒ〕注：読者は直ちに、シュピートホフ教授が、経済様式という語句を2つの別の事柄に用いていることを知るだろう。すなわち、経済生活の一定の型（制度的機構）、およびそれらの型を取り扱うために構成される概念的モデルが、それである。〕

私の立場を理解するには、「歴史的」理論と歴史の違いを把握する点にかかっている。なぜなら、「歴史的」理論は歴史ではなく、真の理論だからである。理論と対比された意味での歴史は、諸現象と諸過程をそれらの唯一性〔個性的独自性〕において取り扱う。歴史は、理解すること、またおそらくは、判断することを目指して、諸現象と諸過程を記述し説明する。歴史は、唯一性と個別性ならびに、唯一性と個別性によって特徴づけられる諸現象の存在と変化にかかわるものである。歴史家の陳述は、常に唯一

的〔個性的独自の〕で特徴的なケースについて、なされる。歴史家としては、彼は一般化の性格を持つ認識を目指してはいない。しかし、一般化することこそ、まさに理論家の目標点である。一般化の性格をもつ陳述は、永遠の諸現象に関してなしうるのと同様に、時間に制約された諸現象の斉一性に関してもしない。永遠の諸現象に関する陳述は、普遍的妥当性を有するものであり、理論にとってふさわしい主題である。しかし、経済現象のほとんどが時間の変化に服していることから、経済理論家は、永遠のものだけを取り扱うだけにとどまることはできない。時間に制約された諸現象に関する一般化の性格をもつ陳述は、同様に、望ましく、また、必要である。もちろん、こうした陳述を経済諸現象と諸過程の厳密に唯一的〔個性的独自の〕な諸側面に関しておこなうことは不可能だろうが、時間を越えて斉一性を示す諸側面については可能であろう。一定の期間または一定の時代を通じる斉一性——時間に制約された斉一性——は、理論的な取り扱いを受けることができる。だが、時間に制約された斉一性 (time-conditioned uniformities) としてのその性格ゆえに、それに関わる理論は、普遍的な適用可能性を持つものではない。つまり、それは「歴史的」理論なのである。経済様式という概念は、その助けにより時間における斉一性が理論的研究に役立ちうるものとなるところのツールである。こうした陳述を、若干の例で説明しよう。

一方と他方がいずれも本質的に類似性を持たないほど異なった経済諸現象は、直接、理論的取り扱いになじまない。こうした現象が起こる場合には常に、その発生は事態の背後にある諸状況の唯一〔個性的独自〕的な連鎖を通じて説明されなければならない。例えば、インフレーションの場合がそうである。インフレーションの現象を理論的研究に役立て、その上また一般化の性格を持つ陳述に従わせるために、純粹理論はインフレーションのモデル創造を試み、それによって一般化の見地から取り扱われる一つの構成物 (a construct) を作り出す。その基礎上で貨幣数量説の発展が可能になったのであるが、他方で、インフレーション現象は、経済形態論

(economic Gestalt theory) には、なじまないままであった。経済形態論は、ここでは適用しえない。なぜなら、財貨量に関連する貨幣および信用の量の変化は、規則性を示すような結果をもたらさないからである。有効 (available) な流通手段および信用の増加は、純粹理論が想定するように、不変の財貨量に対応するわけではない。現実には、この増加は、財貨に対する需要の増加をもたらし、生産を刺激し、こうして有効な商品量の増加に照応するのである。随伴する価格変化に関しては、それが生じるのは確かだとしても、価格騰貴がどの程度、有効な流通手段および信用額の増加に立ち遅れるかは、確かではない。その上、購買力の増加は、財貨の統一的市場に向かうわけではない。それは様々な形で、資本市場や貨幣市場に、また様々な財貨およびサービス市場に流れていき、それぞれの場所で相異なる諸条件にぶつかり、その結果、相異なる効果を生み出すのである。インフレーションは資本市場および貨幣市場で貸付可能な資金の供給の増加として現れ、したがって、利子を押し下げる傾向があるが、他方で財貨およびサービス市場は対照的に、需要の増加と、その結果たる価格騰貴を示す。けれども、これらの市場はインフレーションが始まる場合には、均衡状態にあるか、あるいは過剰供給または需要超過の状態にあるだろう。さらに、いくつかの商品の需要は弾力的であり、あるいは、非弾力的である。ある生産は単位費用の縮減のもとで拡張可能であるが、他方、別の場合には、単位費用が増加するだろう。仮にインフレーションの現実的な像を描くことを望むのであれば、事態の進行に影響を及ぼしているこれらすべての差異が考慮されなくてはならない。この場合、研究は斉一性から出発することはできない、ということは明白である。なぜなら、すべてのデータは唯一〔個性的独自〕的であり、また、過程が特殊な位相によって規定されているからである。経済形態論は、この場合には適用できない。というのは、インフレーションの個別的ケースの進行を理解することができる、とするに足る単一の説明原理などは、存在しえないからである。純粹理論だけが、貨幣プラス信用および財貨の数量を孤立化させて、いわば、

〔139〕 あたかも、その2要因以外の国民経済全体を凍結させることによって、貨幣数量説として知られる一般的妥当性という、あの深遠な結果を得るのであろう。この例で、純粹理論のための舞台を設定する際に、何と乱暴な簡略化が、と言うよりむしろ、現実の歪曲が、仮定されているかが、明らかにされたはずである。他方で、そのことは、また、経済生活を現実的に明らかにすることの困難さをも示している。

しかし、時間に制約された諸現象が斉一性を示すような場合には、経済形態論を適用することができるし、また、限定された適用可能性をもつところの諸定理を得ることができる。確かに、数千年にわたって、全地球上で、観察者に自らその成り行きを示している経済生活は、経済形態論によって全体的に取り扱うことができないほど、深い差異で満ちあふれている。それにもかかわらず、差異は、特殊な斉一性によって特徴づけられる経済生活の様々な型のモデルを企図するのを妨げるほど、深いものではない。こうした型は、唯一「個性的独自」的で特殊な諸制度によって規定されるが、そこに適応しうる経済理論によって取り扱われることができる。経済様式のモデルが格好なものとなるのは、ここである。

「歴史的」理論は経済生活の全体的パターン、すなわち制度的機構のみならず、個別的諸制度も取り扱うことができる。後者は「歴史的」理論に適合的であるが、それは個別的制度が、問題の様式モデルに映し出される制度的現実の部分および区画だからであり、またそれらが経済理論の必要とする斉一性を示しているからである。例えば、景気循環は資本主義の型、ないし、様式に典型的な一つの制度 (an institution typical of the pattern, or style, of capitalism) である。もしも、景気循環が斉一性を示さなかったならば、また、もしも、個々の循環がそれぞれ他の循環の原因と本質的に異なった原因をもっているとすれば、我々はいかなる景気循環理論も、持つことはできなかったであろう。しかも、もしそのような場合であれば、実際にはそうではないのだが、景気循環は資本主義の経済様式には属さないし、ちょうど地震や戦争のように、経済生活を襲う偶然事とな

るであろう¹⁵⁾。

アルトゥール・シュピートホフ バーデンヴァイラー

- 15) すべての景気循環が唯一的[個性的独自の]な様相を示すのであり、それは歴史的にのみ説明されうるし、またその範囲内で景気循環は経済史の主題である、ということは言うまでもない。だがその上、景気循環は、類的現象(generic phenomena)でもあり、どこで、いつ、その現象が起ころうとも、本性上斉一的であり、厳密な類似性を示している。そのため、景気循環は経済形態の「歴史的」理論の主題ともなりうるのである。景気循環は時間に制約されていること、またそれがその内部で特殊かつ典型的な現象を代表しているのであるが、その資本主義的様式に属していること、このことが明確に理解されなければならない。資本主義がその本質的な点において変化するか、あるいは完全に消滅してしまうならば、景気循環もその諸特質を変えるか、消滅してしまうであろう。景気循環理論は、資本主義的様式の支配するところについてのみ適用することができ、それが支配するところには一般的に妥当する。すなわち、それは「歴史的」理論である。

IV 比較概念論的な若干の注解

シュピートホフ自身の語るところによれば、シュピートホフの方法の独自性についてその変動論を例証として最初に言及したのは、ボン大学時代の僚友シュムペーターであり、その後E・ザリーンがそれに“anschauliche Theorie”という固有の名称を与えたという⁽¹²⁾。われわれは、できるだけ内容を斟酌して、旧稿⁽¹³⁾以来、その用語にあえて「具象(的)理論」という訳語を与えている。ちなみに、わが国の先例では、高島善哉氏や大泉行雄氏、さらに秋草実氏は「直観(的)理論」、板垣与一氏は「観照(的)理論」と訳出されている⁽¹⁴⁾が、それでは、あまりにシュピートホフの真意とするところから、かけ離れる惧れがあるように思われたからである。

この点で、英訳に当たったレートリッヒのつぎの指摘は、きわめて示唆的

であった。「[英独]両国語を知る者なら誰しもが同意するように、anschauliche Theorieの逐語訳は不可能であり、その本質的な意味合いと用語を造り出す学者の意向とが、英語の対訳部分の選択基準とならざるを得ない。シュピートホフ教授のanschauliche Theorieという方法は、理論的分析の主題がいかなる現象であれ、その現象の総体性を反映することを目指しているということ、このことを読者は、画像が展開するにしたがって、知るであろう。だが、現象の総体性(the totality of phenomena)は、またゲシュタルト心理学の仕事を通して今日一般に知られるゲシュタルト思想によっても強調されている。こうした事情の下で、訳者はドイツ語の原語を意識するために、“economic Gestalt theory”を選ぶことに決めたのである。そうするのは、また、日常言語や既存の経済理論において矛盾する意味で用いられることのない語句を使用するのが便宜的と思われたからである。」⁽¹⁵⁾ ここには、経済学の背景をなす実証主義的な英米の認識論と根本的に異なるドイツの認識論的伝統への特別な配慮が読み取れるであろう。筆者が、“anschauliche Theorie”を「具象理論」と訳出したさいに、念頭においていたのは、このレートリッヒの指摘であった。

また、英米世界にシュピートホフの方法を紹介したF・C・レーンとJ・C・リーマースマは、それをドイツ観念論哲学の伝統、とりわけW・ディルタイ、W・ヴィンデルバントそしてH・リッケルトに連なる「精神科学の方法」に関連付けて、つぎのように説明している。「歴史法則と法則定立的科学とは相互に排他的である」とする著名なリッケルト命題に象徴される伝統は、A・コントに代表されるフランス実証主義やその影響下にある英米の社会学者や経済史家のそれとはまったく「異なっていた」。「この観念論哲学の背景が、ウェーバー、ゾンバルトそしてシュピートホフのような人たちの基礎概念と基本用語を規定していた……英米の経済史家たちの伝統は、理論と歴史を別々の教科であるかのように分離してきたが、シュピートホフにおいては、理論と歴史が相互浸透している教科(a discipline in which theory and history interpenetrate)を重視して論

じているのである。』⁽¹⁶⁾ F・C・レーンとJ・C・リーマースマが挙げているその3者こそ、実にシュムペーターが『『最新の』歴史学派（‘youngest’ historical school）』と名づけ「そのもっとも傑出したメンバー」として論及していた⁽¹⁷⁾ 3名にほかならない。こうした方法論史的背景について詳しくは、さしあたり、不十分ながら既出の拙稿（注(13)）の参看に委ねるしかないであろう。

(12) Arthur Spiethoff, Anschauliche und reine volkswirtschaftliche Theorie in ihrem Verhältnis zueinander, *Synopsis*, Festgabe für Alfred Weber, Heidelberg 1948, S. 648.

(13) 拙稿「シュピートホフ『経済変動論』の方法的特質」, 増補版『恐慌論史序説』（梓出版社, 1984年）, 第2部第1章, 特に, 第2節, を参照されたい。

(14) 高島善哉『経済学史の基礎理論』（三省堂, 1944年）, 大泉行雄訳・オイケン『国民経済学の基礎』（勁草書房, 1958年）, 板垣与一『政治経済学の方法』（勁草書房, 増補新版1963年）を参照のこと。また, 秋草実「シュピートホフの経済史理論としての『経済様式論』」, 『山口経済学雑誌』第22巻第1・2合併号, 1973年, 45-6ページ。

(15) Note by Fritz Redlich, *Enterprise and Secular Change. Readings in Economic History*, edited by Frederic C. Lane and Jelle C. Riemersma, London 1953, p. 442.

(16) Frederic C. Lane and Jelle C. Riemersma, Introduction to Arthur Spiethoff, *Enterprise and Secular Change*. *ibid.*, p. 432.

(17) Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, London 1954, p. 816.

東畑精一訳『経済分析の歴史』第5分冊（岩波書店, 1958年）1714ページ。

V 結びに —— マルクスの方法視角から

なるほど, 非歴史的な演繹の方法をもって「抽象的科学」たる経済学の方法と認定した古典派最後の体系的総括者J・S・ミル以来, いわゆる主

流派経済学 (mainstream economics) において「経済分析で今日犯されている基本的過ちのほとんどは、経済学者の持っている他のいかなる用具の欠陥によるよりも、まさに、歴史経験の欠落に基づくことの方がはるかに多い」⁽¹⁸⁾ というシュムペーターの指摘は、今日的妥当性を、依然（否むしろ、ますます）、保持しているかにみえる。この意味では、上で見たように、〈経済理論の歴史的 성격〉を強調するシュピートホフの方法的立場は、独自のものであった。

ところで、資本主義「社会の解剖」を経済学のうちに求めたマルクスも、また、〈経済理論の歴史的 성격〉を重視する一人であった。だが、彼にとって当該問題の理解は、シュピートホフとは、まったく異なったものである。「経済学的諸範疇を、それらが歴史的に規定的であったその順序で並べることは、実行できないことであり、また誤りであろう。むしろ、それらの序列は、それらが近代ブルジョア社会で相互にたいしてもつ関係によって規定されているのであって、この関係はその自然のままの順序として現れるもの、あるいは歴史的発展の系列に照応するものとは、まったく逆である。ここで問題となるのは、経済的諸関係が相異なる社会諸形態の継起のうちで歴史的に占める関係ではない。……問題なのは、近代ブルジョア社会の内部におけるそれらの仕組みである。」⁽¹⁹⁾

つまり、マルクスにおいては、初めから歴史的實在たる近代資本主義社会の理論的把握が問題とされていて、その際、歴史的方法に対して論理的・体系的方法が「科学的に正しい方法 die wissenschaftlich richtige Methode」として、はっきりと確認されていたわけである。この点で、『資本論』第一巻第2版後記で引用されているような、マルクスの「理論は、その根本において、スミスやリカード学説の必然的継承であり」、その「方法は、全イギリス学派の演繹的方法である」との批評⁽²⁰⁾ は、事態の一面を衝いてはいるが、もちろん不十分である。むしろ、マルクスの意図は鮮明である。課題は、「ブルジョア経済学体系の批判的叙述」であり、「体系の批判であると同時に、叙述による体系の批判でもある」（1858年2月22日付

けラサール宛の手紙)⁽²¹⁾。経済学の先行諸学説の批判的超克・止揚、これこそが企図されていたものである。先行する経済学の生成史をたどり、この下向の道が到達したところから、抽象的なものから具体的なものへの上向の道へ転じるところに始まる経済学の体系化と諸体系の形成、それを「科学的に正しい方法」と認めたうえで、それに対置されたのが上向法に基づく「経済学批判体系（6部編別プラン）」に他ならない⁽²²⁾。

これに反して、シュピートホフの学説は、「ブルジョア経済学の独創的な育成をすべて排除した」「ドイツ社会の特有な歴史的発展」⁽²³⁾が、古典派経済学等の先行諸学説から断絶したままで、独自に生みださざるをえなかったところの、きわめて特異な方法論であったといつてよいであろう。それは、経験的資料からの帰納のみを重視する新旧ドイツ歴史学派の方法を「新たな洗練された水準に押し上げた」⁽²⁴⁾ものというのが妥当である。W・ディルタイの精神科学的方法の影響下に自然法則の経済生活への転用を拒否する「最新の歴史学派」の一人として、「まったく経済学者ではなかった」ウェーバーや「シュモラー以上のシュモラー」となったゾンバルトとは違って、あくまでも専門的経済学者であったシュピートホフは、探求の帰結ではなく手段としての恣意的構成物たる前者の「理念型」や、「経済精神（Wirtschaftsgeist）」と現実的側面をより重視する後者の「経済体制」に代わる概念構成手段として、「現実型」と「経済様式」とを提唱したのである。そこには、3者3様に、ドイツ観念論哲学の認識論的伝統が色濃く投影されていた。彼らに通底するのは、客観的な経済法則の存在とその認識可能性とを拒否する立場にたつて、これに代わる認識方法として主張するところの、一方の客観世界における無限の事物の混沌に他方の思惟構成物としての形態類型（Gestalttypen）を対置する二元論である。

シュピートホフの「経済様式」は、ウェーバーのユートピー（理想像）としての「理念型」やゾンバルトの総体的典型（totality pattern）としての「経済体制」とは異なる「現実型」とであるとされ、その内的首尾一貫

性は「芸術作品の内的統一性と同様」に、見ることのできる「視覚的にはっきりした形態の統一性に依存している」として、芸術史の時期区分を特徴付ける「様式（スタイル）」からの類推であるとも指摘されている⁽²⁵⁾。そうだとすれば、シュピートホフの「経済様式」認識は、科学的認識とは異なるものといわなければならない。なぜなら、「直観と表象との概念への加工」によって獲得される「頭脳のなかで思惟全体として現れる全体は、思惟する頭脳の産物であり、この頭脳は自分にだけ可能な仕方で世界を我が物にする（aneignen）が、その仕方は、この世界を芸術的に、宗教的に、実践的－精神的に我が物とするのとは異なった一つの仕方である」⁽²⁶⁾からである。その「芸術的に、宗教的に、実践的－精神的に我が物とするのとは異なった一つの仕方」こそが、科学的認識方法であるということは、いうまでもない。

- (18) Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, London 1954, p. 13.
東畑精一訳『経済分析の歴史』第1分冊（岩波書店、1958年）24ページ。
- (19) K. Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857-58*, MEW, Bd. 42, Dietz Verlag Berlin 1983, S. 41. 高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』（大月書店1959年）、29-30ページ。
- (20) K. Marx, *Das Kapital*, Buch 1, MEW, Bd. 23, Dietz Verlag Berlin 1962, S. 22/25. 『全集』第23巻a,（大月書店1965年）19ページ。これは、マルクス自身が引いているロシアの経済学者N・ジーベル（1844-88）の『資本論』評価である。
- (21) 岡崎次郎訳『資本論書簡』(1), 大月書店 1971年, 236ページ。
- (22) 「経済学批判序説」中の「経済学の方法」をめぐる理解については、『マルクス経済学レキシコンの葉』No.2,（大月書店、1969年3月）の久留間敏造氏の指摘に示唆を得た。特に、ヘーゲルからのつぎの引用は興味深い。「真理が実存する真の姿は、真理の科学体系以外にはありえない……」, 「知識は科学としてののみ、すなわち体系としてののみ現実的であり、表示されうる」云々。ちなみに、当該箇所は、長谷川宏訳『精神現象学』（作品社、1998年）では、「真理が明確な形をとって存在する真の形態としては、学問的な体系しかありえない」（004ページ）, 「知が学問体系としてののみ現実的であり、現実的な表現たりうる」（015ページ）と訳されている。

ところで、筆者が、かつて強調したごとく、「残念ながら哲学者たちはこのプランを研究していないし、経済学者たちはそれを挙示するだけである」という A・M・コーガン (1926—) の鋭い指摘は、依然として覆されていない (拙稿「H・グロスマンの『プラン問題』」, 『増補恐慌論史序説』梓出版社, 1984 年, 第 4 章を参照されたい)。その後の『資本論』成立史研究の進展をもってしても、いまだ「それらがどのように展開されるべきかを具体的に示唆するマルクスの纏まった考察が未発掘なままにとどまる」(大村泉「『資本論』体系の成立—『経済学批判』から『資本論』へ」, 『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 35 号, 2001 年 1 月, 八朔社, 45 ページ) だけに、真剣な取り組みが必要であろう。

- (23) K. Marx, *Das Kapital*, Buch 1, *MEW*, Bd. 23, S. 22. 前掲書, 17 ページ。
- (24) Frederic C. Lane and Jelle C. Riemersma, Introduction to Arthur Spiethoff, *Enterprise and Secular Change*. *ibid.*, p. 441.
- (25) *Ibid.*, p. 442.
- (26) K. Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857–58*, *MEW*, Bd. 42, Dietz Verlag Berlin 1983, S. 36. 前掲『経済学批判要綱』, 23 ページ。

【2001 年 4 月 7 日 脱稿】

(2001 年 5 月 9 日 補整)

【付記】 本稿は 2001 年度法政大学国内研究員制度による研究成果の一部である。

The Historical Character of Economic Theories: On Spiethoff's Methodology of Political Economy

Mitsutoshi Ozawa

《Abstract》

Arthur Spiethoff is well known as one of the few members of the German Historical School to have made a substantial impact on mainstream economics, especially in the field of business cycle theory. But his unique methodology of political economy is generally unknown.

This paper examines Spiethoff's original methodology of political economy. He was interested in a discipline in which theory and history interpenetrate. He calls it "anschauliche Theorie", and F. Redlich translates that German phrase into English as "economic Gestalt theory". The study begins with an introduction of Spiethoff's own summary of methodology which was provided in the new preface of his postwar book (1955). This is followed by a survey of English translation by F. Redlich of another Spiethoff's methodological article. Finally, I consider the question of the historical character of economic theories from the point of Marxian view.